

小田原教育

第103号

平成17年12月19日

コアジサシ



1995年に小田原市の鳥に選ばれました。近年は少なくなりましたが、毎年飯泉取水堰下流の中州に集団で営巣しています。

巣は地上に少しくぼみを作り、中に小石を敷いただけの簡単なもので、卵やヒナは周りの小石や砂利と同じような色をしていて注意しないと見分けが付きません。

翼はやや灰色をしています但全身が白っぽく、頭の上から後ろにかけては黒くなっています。クチバシは黄色く先端が黒い色をしています。名前の通り空中でねらいを定めると、アジを刺すようにクチバシから一気に水中に飛び込んでエサを捕らえます。

目 次

巻頭言

「心をかけられ子どもは育つ」

教育研究所運営協議会委員長

..... 2

1 寄稿

「ノーマン市（アメリカ・オクラホマ州）教育視察」

小田原市教員海外研修視察派遣教員

..... 3

2 特集

「キャンパスシティおだわら」

企画政策課 おだわらルネッサンス推進班

..... 4

3 小さなころみ

①「携帯メール情報配信サービスの試験運用」

教育ネットワーク利用に関する研究員

..... 6

②「すべての子どもにある教育的ニーズ」

特別支援教育に関する研究員

..... 7

③「豊かな心情や生きる力を育むための環境や援助について」

東富水幼稚園

..... 8

④「わたしは変わる」

教育研究所教育相談員

..... 9

4 特色ある学校の取り組みから

「平成17年度 小学校英会話活動研究委託校としての取り組み」

足柄小学校

..... 10

5 ある教室から

「子どものより良い育ちを願った教室環境と教材の工夫」

学校教育課指導主事

..... 11

6 研究所だより

教育研究所指導主事

..... 12



「心をかけられ子どもは育つ」

教育研究所運営協議会 委員長

この夏の教育講演会は元NHK長野放送局長 清川輝基氏の「人間になれない子どもたち～メディア漬けと子どもの危機～」という演題のお話だった。

NHKのディレクターとして数々の番組を編成され、そのための調査・取材などで多くの事例に出会われた氏から、現代の子どもたちの体の発達が危機的状況にあり、そのことと1960年代以降の、子どもたちを取り巻く環境の変化が関連しあっていること、特に乳・幼児期からのテレビ・ビデオ等への長時間の接触（→メディア漬け）が人間らしい心の発達の遅れにつながっていると指摘された。

人間らしさ（論理的に考える能力・欲望を抑える心・思いやり・未来を考え準備する力などが含まれる）は脳の前頭葉の働きがつかさどり、生活様式の変化は子どもたちのその発達をはばんでいるという。

このお話を聴いたあと、その以前にも以後にも起こっている子どもや若者の異常な行動・犯罪が氏の話されたことも遠因（要因？）の一つとして考えられるのかと思いを深くした。

遠い昔となってしまった私の子ども時代

は環境が大きく変化する前の時代。近所でいち早くテレビを入れた家に人々が集まり、「月光仮面」やらプロレス中継やら今から思えばテレビ草創期の番組を見せてもらった。その場には生き生きとした活気があり、目をみはって画面を見る高揚感とにぎやかな会話があった。

しかし、昔のことを懐かしんではいけない。目の前の子どもたちは次代を担う大切な存在である。生活が便利になるようにつくってきたのは大人たち。子どもたちにそこに置かれた状況を、年代に合わせた言葉で伝え、子どもたち自身がその成長の過程でどう自分の生活（生き方）をつくっていったらいいのか、折にふれ機会を見つけて考えさせたいものである。

生活が便利になっても変わらないものがある。人間どうしがつながりながら支えあいながら世の中はつくられその中で生きていくということ。心をかければ必ず子どもたちは受け止める。子どもたちの真っ直ぐな目は、私たち大人（教職員・親・地域の人々）が子どもたちに向けて何を伝えようとし、何を大切にしようとしているのかを見ている。

寄 稿



ノーマン市（アメリカ・オクラホマ州）教育視察

小田原市教員海外研修視察派遣教員

11月5日から1週間、町田小学校・千代中学校の各教諭2名とともにオクラホマ州ノーマン市を訪れました。ノーマン市は人口が9万5,6千人ほどの市で、小学校15校、中学校4校、高校2校、更にオクラホマ大学の広大なキャンパスを抱える学園都市で、市街地は樹木が多く植えられ郊外は草原の続く農村地帯が広がっていました。

今回私たちは、その中の小学校2校、中学校2校の学校訪問をさせていただきました。

最初のマッキンリー小学校では、全校集会を開いて私たちを歓迎してくれました。そこでの子どもたちは、大勢が一堂に会しているにもかかわらず、私語が全くなく、落ち着いた参加態度で、集団生活でのしつけがよく行き届いていると感じました。また、トゥルーマン小学校でも、授業を受ける児童の視線がいつも話し手の方をしっかりと見ていて感心しました。

教師は教科書をほとんど使わず、教材や教具、指導の仕方を独自に工夫して丁寧に授業を行っていました。ウィッチャー中学校では、オーケストラやバンドの授業を参観しましたが、定期的にプロの演奏家の指導を受けているということでハイレベルな演奏が行われていました。各学年に1人ずつカウンセラーが配



置され教師との情報交換も盛んに行っているということでした。ロングフェロー中学校では、理科と社会を合体した授業で、火おこし体験や発掘調査体験などが行われていましたが、これらはノーマン市が進めているオクラホマ大学との連携プロジェクトの一つということで、大学の自然博物館の指導員も参加をしていました。

小学校では、どの学校でもセキュリティの確保ということで、入り口で来校者をパソコンでチェックし、氏名を印刷したビジターの名札を胸につけるようになっていました。また、パソコンの普及が目覚しく、どの学校でも各教室に1台は必ず設置され、パソコンのワープロ機能を使つてのまとめ学習や各自のフロッピーをPC、TVにつなげての発表会、10数台のノートパソコンを教室で使つてインターネットでの調べ学習などが活発に行われていました。また中学校では生徒の学習成績などの情報を保護者が自宅でIDパスワードを利用してパソコンからのぞくことができるように準備を進めていました。さらに、どの学校でもオクラホマ大学の学生たちや保護者がボランティアで児童生徒の学習のサポートをしているという場面に多く出会いました。学校の教師、保護者が一体となって子ども達の力をよりよい方向に伸ばすよう一人ひとりに丁寧に関わっている姿が印象的でした。

私たちは、ノーマン市の教育を視察させていただいたことで改めて自国の教育を見つめ直すことができました。このような貴重な経験をさせていただき、深く感謝いたします。

スカラーおだわらをめざそう！

キャンパスシティおだわら

小田原市企画政策課 キャンパスシティ構想推進マネージャー



「小田原の資産を生かして、まちじゅうを学びの場にしよう」そんなキャンパスシティ構想の柱となる事業「キャンパスシティおだわら」が、10月1日にスタートしました。これは、小田原市や関係団体などが開催する学習事業への参加が100回を超えた方を、「スカラーおだわら」という称号で認定するシステムで、まちの再生と創造をめざすおだわらルネッサンス推進本部における取り組みの一つです。

小田原市ではこれまで、誰もが生きがいをもって心豊かに暮らせる社会を目指して生涯学習を推進するとともに、社会経済の変化の中で新たに生じる課題に対応していくために、さまざまな学習事業を実施してきました。このような事業をきっかけとして、多くの人材が主体的にまちづくりに関わり、多様な交流も広がってきています。しかし一方では、事業の実施主体が各所管に分かれているため、情報の提供方法もばらばらで分りにくく、多分野の事業で学習を重ねても、その知識や経験が統合されて評価される機会はありませんでした。

そこで「キャンパスシティおだわら」では、100回という分かりやすい目標を設定することで、意欲をもって学習に取り組んでいただくとともに、市政への参加意欲の高い人を発掘するチャンスに結びつけようとしています。一つの区切りをつけることで、次のステップを大きく踏み出す力にする、「学びをマネジメントする」という発想なのです。スカラー（scholar）とは、学習者という意味です。ただの呼称にすぎないかもしれませんが、名前が付くことで、学習を重ねてきた自信を深めていただき、今後はその



学習を生かしていただきたい、さまざまな叡智を、享受するばかりではなく、再生産するようになっていただきたいと願っています。また、対象となる事業を一覧にしてホームページやリーフレットで提供しますので、自分にあった学習情報が探しやすくなり、事業参加率のアップも期待されます。

キャンパスシティおだわらの参加方法

①キャンパスシティおだわら生徒手帳を入手する。

- ・市役所生涯学習政策課、中央公民館、尊徳記念館、マロニエ、いずみの窓口にあります。
- ・実費の一部として300円いただきます。

②対象事業に参加する。

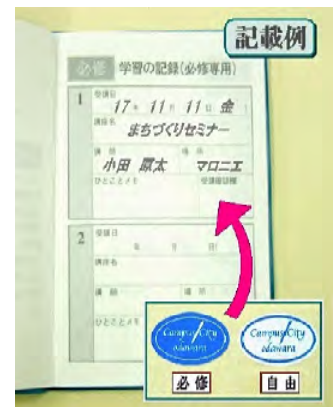
- ・対象事業は、広報紙に**C**（必修）または**C**（自由）のマークが表示されています。ホームページやチラシでもお知らせをしています。
- ・対象事業の参加方法については、それぞれの事業の案内を確認してください。

③生徒手帳に学習の記録を記載し、確認シールを貼る。

- ・シールは、事業主催者から受け取ってください。
- ・事業には「必修」と「自由」があります。ページをお確かめの上、記載してください。

④参加回数が100回になったら、修了認定証を申請する。

- ・申請には、必修10回以上の受講が必要です。
- ・必修20回以上のときは、まちづくり課程として認定されます。
- ・期間は特に定めません。自分のペースでチャレンジしてください。



キャンパスシティおだわらに参加する方には、まず学習の記録をつけるための「キャンパスシティおだわら生徒手帳」を入手していただくのですが、この際、手帳作成費用の一部300円を負担していただいています。有償にしたのは、一部でも負担することで自覚を持って参加していただくこと、挑戦意欲を高めていただくことを目的としています。11月までに、既に130余名の方が手帳を入手され、小田原市民の向学心が高いことがうかがわれます。

また、スカラーおだわらとして認定されるためには、100回のうち少なくとも10回、市が「必修」と区分けした社会的な課題を学習する事業への参加を求めています。これも、自分の趣味を広げるばかりではなく、まちづくりへの参加意識を高めてもらうために、ハードルを高く設定しているところです。

キャンパスシティおだわらを通し、学ぶことの楽しさや、それを生かす喜びを多くの方に体験していただきたいと願い、これからも制度の広報と充実を図っていきたいと思いますので、どうぞご協力をお願いいたします。

おだわらルネッサンス推進本部（企画政策課 33-1315）

キャンパスシティおだわら事務局（生涯学習政策課 33-1712）



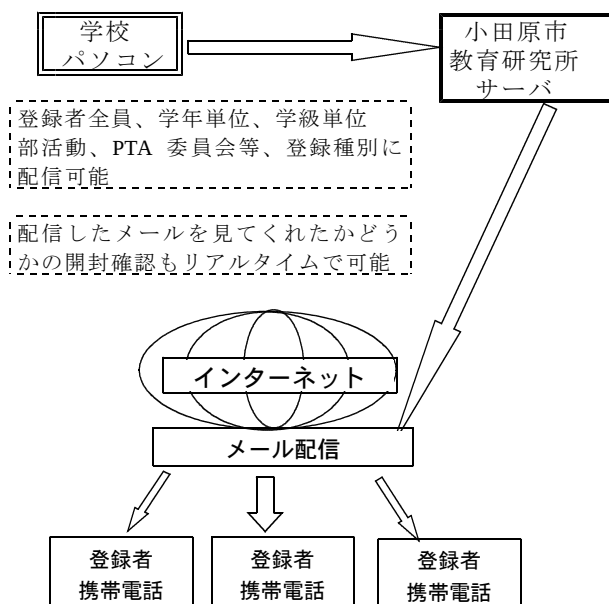
『携帯メール情報配信サービスの試験運用』

教育ネットワーク利用に関する研究員

1 研究の目的

最近、不審者に小中学生が狙われる事件が頻繁に報道され、小田原市内でも事件が発生している。こうした社会状況の中、子どもたちの安全を守ることにについて、多くの保護者が関心を持っている。そこで、市内で発生した不審者情報や防災情報など緊急を要する内容を速やかに保護者の方々に伝えるために、各小・中学校に整備されている教育ネットワークを活用できないだろうかということでこの研究が始まった。

2 システム概要



3 これまでの活用状況

下中小学校と白鷗中学校で試験導入することになり、10月末から希望する保護者の登録が始まった。下中小学校では登録開始から1ヶ月が経過した時点で登録者数は約100名。これは全児童の23%にあたる。

この一ヶ月間に、テスト送信も含めて9通のメールを発信した。内訳は不審者情報3件、行事情報3件、その他3件である。また、情報発信から、通常2～3分以内で登録者の携帯電話にメールが着信するようである。

【事例1 不審者情報の発信】

配信した3件の不審者情報のうち1件は学区内で発生したものであった。発生時刻からおおよそ40分後には、登録者の携帯電話にメールを発信した。そのメールをきっかけとして、青少年育成会や地域の方々にも迅速に動いていただき、対策をとることができた。メールのスピードが生かされた事例となった。

【事例2 行事情報】

本校では行事实施時、中止や延期の場合のみ電話連絡網を流すことにしている。11月に行った行事では、携帯メールを使って「予定通り実施」という連絡をした。このメールでは、送った登録者に開封確認を求めて、その状況をモニターしてみた。学校からメールを発信したのが午前6時15分。発信から1分後には開封確認の情報が次々と入り、10分後には50%を超えた。子どもたちが登校する時間となる2時間後では77%の開封率であった。100%にならなかったのは開封確認の仕方がわからなかったためと思われる。

4 今後の課題と展望

本格導入までにはまだ様々な課題がある。まず、このシステムを管理するサーバには、携帯メールアドレスなどの個人情報が蓄積される。これらの情報が安全・確実に管理できるシステムを構築していく必要がある。また、現在はモニター期間ということで無料で運用しているが、今後、正式に導入となったときの費用負担の問題もある。さらに、多くの方に登録していただくためには、登録作業の簡便化も必要である。

このようにまだまだ問題点もあるが、早く確実に保護者のもとへ直接情報を送ることができるという点では、これまでの電話連絡網やプリント配布という手段より格段に優れている。携帯メールが第3の情報伝達手段として定着することで、保護者や地域との連携はこれまで以上に密接になることが期待できる。



『すべての子どもにある教育的ニーズ』の活用

特別支援教育に関する研究員

①すべての子どもにある教育的ニーズ

文部科学省が平成15年3月に発表した「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒の全国実態調査」の結果では、知的発達に遅れはないものの学習面や行動面で特別な教育的支援を必要とする子どもについて、6.3%の割合で通常の学級に在籍している可能性が示されました。

その中には、学習障害（LD）、注意欠陥／多動性障害（AD/HD）、高機能自閉症等の軽度の発達障害のある子どもも含まれていると考えられます。児童・生徒の出すサインを見逃がしてしまったために、適切な対応が遅れ、場合によっては問題行動等につながることも考えられますので、そこで、簡潔にそれぞれの症例をあげたいと思います。

②LD（学習障害）の子ども達

学習障害とは基本的には全般的な知的発達に遅れはありませんが、聞く、話す、読む、書く、計算する、または推論する能力のうち特定のものに習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指します。学習障害は、その要因として、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されますが、視覚、聴覚、知的、情緒等の障害や、環境的な要因が直接の原因となるものではありません。

学習障害の子ども達には、行動の自己調整や対人関係等に問題がみられる場合がかなりあり、例えば学校生活において、注意集中の難しさや多動、対人関係等の社会的適応性の問題が現れることもあります。

③AD/HD（注意欠陥/多動性障害）の子ども達

AD/HDとは年齢あるいは発達に不釣り合いな注

意力、及び衝動性、他動性を特徴とする行動の障害で、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすものであり、また、7歳以前に現れ、その状態が継続し、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定されます。AD/HDは集中困難や多動等の状態が幼児期から明らかであり、「性格の問題」ではなく、「発達の問題」として考えられています。よって、家庭の育て方や環境の問題によるものではありません。

また、AD/HDの子ども達の行動は問題行動ととらえられやすく、周囲の人から叱られることも多くなってしまいます。ただし、その状態は一人ひとり異なっているので、一人ひとりの状態を正しく理解し、その子どもに応じた支援が必要になります。

④高機能自閉症の子ども達

高機能自閉症とは、3歳ぐらいまでに現れ、他人との社会的関係の形成の困難さ、言葉の発達の遅れ、興味や関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする行動の障害である自閉症のうち、知的発達の遅れを伴わないものを言います。

高機能自閉症の子ども達は、相手の気持ちや周囲の状況、雰囲気を読み取ることが不得意なため、対人関係をうまく結ぶことができず、集団への不適応を示すことが多くなります。また、言葉によるコミュニケーションに関しても、ある面では流暢に話しますが、ユーモアやからかい、皮肉等、言葉の裏側にある意味の理解が難しいので、いじめの対象にされることがあり、配慮が必要になります。不適切な対応が繰り返されると、二次的な問題を招き、問題行動が出てきやすい子ども達です。



小さなころみ

③

『豊かな心情や生きる力を育むための環境や援助について』

～ かかわりを育てる学級作り ～

東富水幼稚園

○取り組みの背景

本園は、平成12年度より“人とのかかわり”を研究の中心に据え、様々な人との交流について考えてきました。具体的には、保育室のコーナーにおける遊びを通してのかかわりや、室内で深めた友達とのかかわりを戸外での遊びにつなげることなどです。さらに戸外遊びを中心に学級・学年を超えてのかかわりとなるような環境・援助についての工夫を繰り返し重ねながら、現在も研究を続けています。

その中で、幼児一人ひとりを大切にし、援助していくという基本から、次第に集団としてのつながりや育ちに目が向いていきました。また、近年の幼児の姿の中に気になることも見えてきました。そして、研究内容の話し合いの中で、集団に入りにくい子や気になる子への援助、忍耐や我慢のできない子と一緒に生活する子への援助などがあげられました。友達の存在に気づき、共に活動することを経験しながら、葛藤を乗り越えたり、楽しさを共有したりして共に育ち合っていて欲しいと願い、サブテーマを「かかわりを育てる学級作り」とし、今年度は研究を進めています。

○子どもとの出会い

私は、4歳児年少組34人の学級を担任しています。子ども達は、今年の4月に幼稚園という同年齢の幼児が集まり、初めての社会生活を送る集団に入りました。入園当初は新しい環境に慣れず、母親と離れられずに泣く姿が多くありました。教師との信頼関係が十分でないため、思いが伝えられず我慢をしてしまう子がいたり、自分の思いが通らないと手が出てしまう子があったりしました。また、特定の友達とのかかわりが中心で他の友達とかかわれない子もあり、なかなか一人ひとりの子の心や生活が安定しませんでした。

○援助の中で特に心掛けたこと

このような状況の中で、教師との信頼関係を築いていくことを第一として、各々その子の特定の友達とのかかわりを見守りつつ、い

ろいろな友達とかかわれるような遊びを取り入れたり、援助したりしました。また、遊びの中で友達の作っているものを紹介したり、作品や活動の良さに気付けるような言葉をかけたりなど、友達に関心がもてるようなきっかけづくりを心掛けてきました。



○嬉しく思うこと

二学期に入ると、子ども達も園生活にも慣れ、運動会の経験は、クラスのまとまりを高めました。自分の力でやろうとする意欲が出てきて、積極的に物事に取り組めるようになって、友達関係が広がり、友達の良さに気付き、認め合ったりする姿が見られるようになってきました。その中で、私が嬉しく感じたことがあります。「きーりすちょん」という、伝承遊びをみんなで遊んだ後、もう1回やりたいとリクエストがありました。降園時間が迫っていることもあり、グループに分かれてやったらどうかと子ども達に話すと、「グループは嫌だ。みんなでやった方が楽しいよ。」と子ども達から声があがり、降園時間ぎりぎりまでみんなで遊びました。みんなで遊ぶ楽しさを様々な経験の中で感じ、「みんなで」という言葉の意味と気持ちが育っていたことに気付かされ、嬉しく思った瞬間でした。

○これから

これから三学期に向け、「みんなでやると楽しい」という気持ちを大切に、さらに、自分の思いを伝え、やさしさや相手への思いやりをもった友達とのかかわりが深まるよう、試行錯誤しながら具体的な活動の中で援助していきたいと思っています。



小さなころみ

④

『わたしは変わる』

教育研究所教育相談員

教育相談指導学級の小集団にもなかなか入れない子ども達に、学校も年齢も違う2～3人の仲間づくりのころみです。

(経過)

【6月〇日】わんぱくらんどにクマイチゴの赤い実を採りに行った。

雨上がりの日だったので、広い園内は誰もいず貸切り状態。「ヤッター！」と、ビニール袋にいっぱい採った後、A子とB子は滑り台で思いっきり遊んだ。

【その後ジャム作りに挑戦】

【7月〇日】七夕かざり

別の学校のC子と手紙のやりとりを2回程してから、A子、B子、C子と3人で交流を始めた。C子は前の晩からドキドキと緊張していた。この日は七夕飾りを作った。A子、C子は折り紙で作った飾りをB子に教えていた。飾り付けが終わり、最後に願いごとを書いた。A子が「不登校がなおりますように」と素直に自分の気持ちを書いたら、B子もC子も「学校に行かれますように」と書いて見えないように短冊をササに結んだ。(しらさぎ会館 明るい会議室にて)

【7月〇日】コラージュに挑戦

1学期最後の交流に、広告や新聞紙の好きなところを切って画用紙に貼るコラージュを試みた。「ワーイ、おもしろそう！」と始めた。(しらさぎ会館和室にて)
作品は本人の許可を得て掲載しています。

(コラージュとは、「のりで貼る」という意味で、雑誌や広告、新聞などの写真、模様などを貼り付け作品を作る。自分で「選び→切り(＝破壊のプロセス)→レイアウトし→貼る(＝再構築のプロセス)」という制作過程が、言葉以外で自分を表現できる。)



色彩豊かで切りぬきも大きい。(A子)



途中でおしまいになってしまった。(B子)



頭の上に何かのっている。(C子)

A子はいろいろな関わりをとおして、9月になり教育相談指導学級に通級し始めた。仲間と体を動かしたり、笑ったりと「楽しむ」中で、自然にわいて出てくるころの動き(衝動)が、活動する喜びになるのである。B子とC子にも「あなたは変わるよ」と「あなたはできるよ」の2つのメッセージを送り続けていきたい。このメッセージをどのような方法で伝えるか試行錯誤の毎日である。

足柄小学校

平成17年度 小学校英会話活動研究委託校としての取組み

足柄小学校

神奈川県教育委員会の委託を受けて今年度は2年目を迎えました。

研究テーマは「分かり合い、伝え合おうとする心を育てる授業の創造」で、サブタイトルは、英会話活動を通したコミュニケーション能力の育成、となっています。

本校がめざす英会話活動のねらいとしては、次の2点です。

- ・英語による歌やゲーム、簡単な挨拶や会話のやりとりを通して、楽しんで英語活動に親しもうとする態度を育てる
- ・英語への関心を高められるよう、環境の整備に努める

また、実際の英会話活動については、低学年は創意の時間で、中・高学年は総合的な学習の時間で扱っています。本校の特色は、ALT（英会話ボランティア）と学級担任が一緒になって授業展開をしているところです。ALTとは事前に打合せをしています。十分な打合せができないのが悩みです。さらに、毎週金曜日の朝の時間には、15分間ハロータイムとして、ビデオを見ながら会話の練習をする、など全校で取り組んでいます。

1 取組みの中からいくつか紹介します。



ハロータイムで、ビデオのアニメ「シンデレラ」を見て会話の練習を繰り返ししているところです。



ALT（外国人英語指導助手）による授業です。I saw a _____ フレーズに単語を入れての練習です。

2 次年度に向けて

3年目は発表の年になりますが、教材開発をさらに進めていくなかで、ALTと学級担任がしっかりと取り組み、質の高い授業ができるように努めていきたいと思っています。



ある教室から

「子どものより良い育ちを願った教室環境と教材の工夫」

学校教育課指導主事

教室に入ると、子どもたちの視線の先に、新採用の先生の笑顔が見えます。そして、教室全体に、子どもたちを温かく受け止めている雰囲気漂っています。

教室をぐらりと見渡すと、壁には、絵や日記などの作品がたくさん掲示され、その一つひとつに丁寧なコメントが書かれ、子どもたち一人ひとりを大切にする姿勢が読みとれます。教室の環境は子どもたちにとっての大切な学習の糧であり、教師の工夫の見せ所でもあります。この教室には、子どもたちにとって何が必要かを意識した掲示物も貼られています。例えば、時計の文字盤は、大きく10分刻みの数字がつけられ読みとりやすくされています。また、子どもたちが1日によいことをどれだけ見つけられたかの数や、その一年間のトータルを示すカウンターのような掲示物も貼られています。他にも、子どもたちにどのような学びの場を提供するかを、日々工夫し、教室環境をつくっている様子が感じられます。

さて、今日の授業は、小学校3年生の理科『明かりをつけよう』の単元の導入です。子どもたちが的あてゲームを行うことからスタートしました。

教卓に乗っている自作教材は、ダンボール紙の的にボールが当たると倒れ、紙の裏にある導線同士が接触して、つながっている豆電球に明かりが点くというもの。いくつか並んでいる的の中には、紙の裏に導線がないものや絶縁体をはさんであり、当たって倒れても豆電球が点かないものがあります。明かりが点くための条件や、電気を通すものと通さないものの存在などの学習内容を段階的に理解していけるようになっていきます。授業者が、単元のねらいや指導計画を十分に分析した上で、子どもたちの反応を思い浮かべながら教材の工夫を行い、全体の構想と本時の授業を構想していることがとてもよく感じられます。

子どもたちは、明かりが点くたびに歓声をあげ、倒れても明かりが点かない仕組みに「なぜか」と疑問を感じたりする場面から始まりました。その後、どのようにすれば豆電球は点くだろうかと、一人ひとりでソケット付き豆電球と電池を使って実験を試み、豆電球が点灯するときと点灯しないときのつなぎ方を発表します。先ほどのゲームの時とは違って落ち着いた雰囲気の中で、次々に発表する声が聞こえます。子どもたちは、最後まで集中し、学ぶ姿勢が崩れることなく、動と静のメリハリのある授業が展開されました。



今後は、的あての仕組みをみんなで考え、この時間に浮かんだ「どうしてだろう」のなぜ解きをしながら、学び続けることになります。一人ひとりの子どもたちのより良い育ちを目指した授業者の様々な工夫がよく伝わってきて、とても喜ばしく感じました。

ここ数年、各学校にフレッシュなパワーが続々と生まれています。そして、これからの学校教育を支える、頼もしく、しかも大きな力になっています。そのフレッシュな思考や視点に学ぶところも大いにあるのではないのでしょうか。若い先生も、ベテランの先生も、共に理想の教育を目指して日々研鑽していただければと思いました。



研 究 所 だ よ り



教育研究所指導主事

☆ 県教育研究所連盟教育研究発表大会

10月17日に伊勢原市立中沢中学校を会場に行われました。小田原市からは小田原市教育相談指導学級主任が「適応指導教室におけるITを活用した支援」というテーマで発表しました。小田原市教育相談指導学級にインターネット環境が入ったのは平成12年、メール交換やら、学級日誌ソフトの活用による二つの教室の連携など、様々な活用がはかられ現在に至っています。当日は会場から取り組みについての活発な意見交換が行われました。



なお、教育研究所に県内研究機関の研究発表資料がありますのでご覧下さい。

☆ 金次郎物語を紹介します

研究所で発行した読み物資料「二宮金次郎物語」をご存じでしょうか。金次郎の子どもの頃の話から、生涯にわたる功績がわかりやすく紹介されています。薪を背負いながら勉強した勤勉な金次郎は有名ですが、金次郎の思想や合理的な考えにはまだまだ知られていない部分もあります。小学校4年生が読めるように作成され、50ページ足らずの薄い冊子です。各小・中学校に配布されていますので先生方も一度手にとって読んで頂きたいと思います。

☆ 共同研究のまとめについて

研究所で取り組んでいる共同研究5つのうち、今年は4つがまとめの年となります。いままで研究員の方々が研究してきた内容を、学校現場で活用もできるように集約し、年度内に配布を予定しています。先生方に何度か協力して頂いたアンケートを分析、考察したもの、全学年、全教科の評価規準表、また金次郎物語を活用して頂くための教師用の手引き、「指導編」など。学校配布になる物もありますが、配布後はこれからの授業や児童・生徒指導に役立てて頂きたいと思います。

<放課後の先生>

10月から11月にかけて学校訪問の機会が何度かありました。ある中学校でのことです。放課後も先生方が一度に数人の生徒相手に順番に話し（学習の質問に答える）をして対応していました。時間をやりくりして、生徒と関わる時間を持つとする先生の姿が印象的でした。生徒も先生もとても良い顔をしていました。

小田原教育 第103号

発行日 平成17年12月19日(月)

発行所 小田原市教育研究所

発行者 所長 下澤 禮二

〒250-8555 小田原市荻窪 300

電話 33-1727

研究所ホームページアドレス

<http://www.ed.city.odawara.kanagawa.jp/>

[kyouiku_ken/index.html](http://www.ed.city.odawara.kanagawa.jp/kyouiku_ken/index.html)